

## 特集によせて

### 『クアドランテ』編集委員会

2009年2月17日に、東京外国語大学で「歴史と記憶再考《記憶の場》論の射程を問う」と題するシンポジウムを開催した。以下の諸論文は、そのおりの報告を、討論の内容を反映させる方向で加筆修整したものである。

\*

まず、わたしたちは、過去が語られる仕方に、近年ははっきりとした変化があらわれていると考えている。近年、とここでいうのは、せいぜいこの二十年のことだ。二十世紀の最後の十年からこの方、多様で広範な国と地域において、ほとんど同時代的な現象としてある共通の現象が現れている。これは、ひと言で言うなら、わたしたちが「記憶」「想起」「忘却」といった、広い意味での「記憶」の力に関わる言葉を使って、多くのことを語り始めているらしいという変化である。「記憶」に関わる言葉の洪水は、先進資本主義国だけにとどまらない。アジアの全域においても、旧社会主義圏においても、そしてグアテマラやアルゼンチンなどの中南米においても、かなりよく似た事情が認められる<sup>1</sup>。

歴史叙述の構造や語彙に見過ごせない変化が生まれるとき、この転換に大きな影響を与えている複数の知的展開も存在している。これには、古い記憶術論の系譜からはじまって、モーリ

ス・アルブヴァックスの集合的記憶論の再発見や、アライダ・アスマンの想起の空間論、あるいは近いものではギーセン大学での「想起の諸文化」の研究プロジェクト、さらにはキャシー・カルースやジュディス・ハーマンらによるトラウマ理論の展開がある。わたしたちが以下で論じようとしている「記憶の場」lieux de mémoireのプロジェクトも、そうした有力な準拠点のひとつである。

\*

さて、今回の会議だが、フランスの『記憶の場』の影響下で『ドイツの記憶の場』を編纂したベルリン自由大学のエティエンヌ・フランソワ氏と、ザールラント大学の歴史家であるライナー・フーデマン氏を招いた。加えて国内からは、日本女子大学非常勤講師である小田原琳氏はイタリアにおける「記憶の場」の展開を、また岩崎が東アジアの記憶の場という論点を提示した。わたしたちは、「記憶の場」という共通の論点に即しつつ、ナショナルな記憶を超える歴史叙述の可能性と実践について討議したのである。全体をコーディネートしたのは、東京外国語大学の工藤光一氏であり、多言語的な討議空間を支える介入的通訳として、菊池恵介、杉山佳子、トリスタン・ブルネの三君が協力してくれた。

この2月の会議は、「記憶の場」を問題とし

<sup>1</sup> 日本語圏の事情に即したこの変化については、岩崎稔「歴史学における想起と忘却の問題系」歴史学研究会編『歴史学的方法的回顧』（青木書店、2002年）、263-282頁を参照。

## 6 歴史と記憶

てとりあげるシンポジウムとしては、実は三回目に当たるものだった。振り返ってみるなら、一回目は、『記憶の場』の日本語訳が岩波書店から公刊されるのを期して、2002年3月16日に「ピエール・ノラ編 『記憶の場』をどう読むか——日本語版の投げかけるもの」と題して、日本語訳の責任者であった京都大学の谷川稔氏を招き、またコメンテーターには安丸良夫氏、牧原憲夫氏、岩崎の三人がたって、作業の胸突き八丁に差し掛かっていた日本語訳草稿を用いながら議論した。(その記録は、『クアドランテ』第五号、2003年に収録した)。

第二回目にあたるのは、2003年11月22日に、フランスから直接アカデミー・フランセーズ会員であるピエール・ノラ教授ご本人を招聘して、報告と踏み込んだ応答という形での国際会議を開催したことである。このとき、討論者として立ったのは、日本史家の成田龍一氏、言語学者のイ・ヨンスク氏、フランス史の工藤光一氏、それに岩崎であり、さらに全体のコメンテーターとして、中国社会科学高等研究院の孫歌氏が参加した。実はその折のノラ氏は、運悪く直前に高熱を発して参加そのものが危ぶまれるような不安定な健康状態であったが、事前に渡された討議項目と討論者の論点を一読したところ、俄然元気になり、信じられない気力と激しい熱弁をもって応答し、200人を超える聴衆に強い印象を与えた(その記録は、『クアドランテ』第六号、2004年に収録した)。

それに対して三回目は、格段に視野を広げることができたのではないだろうか。フランス語の『記憶の場』は学術的な出版企画としては、

大きな成功をおさめた。そのためにこそ、フランスを越えて参照されるようになり、英語などに翻訳されただけでなく、そもそもイタリア、ドイツ、オーストリア、オランダ、ロシアなどでも同様の企画が同時多発的に進められたのであった。今回の報告も、どれも直接にフランスの『記憶の場』を論じているのではなく、つねにそれに対する一定の批判を前提にしつつ、ドイツ、ザーランド、イタリア、そして東アジアに問題を開いてみている。そしてそれは、たんにフランスをめぐって行なわれたことを、他の地域に適用しただけということにとどまらない意味があることもはっきりしてきた。ドイツにおけるホロコーストの記憶は、記憶の場の論じ方そのものに影響を与えざるをえない。東アジアの記憶の場は、あらかじめ特定の領域が設定できるような企てにはなりようがないために、この「記憶の場」の複数的な企てを通して、おのずから東アジアという場が浮かび上がるような語りを工夫せざるをえない。そして何より、東アジアの記憶の場は、帝国とコロニアリズムの記憶と骨がらみになったものとして書かれるために、国民国家フランスの自己批判の水準にとどまっていたフランス版『記憶の場』からは、わたしたちはいつのまにかはるかに複雑なところに出て行かなくてはならないのである。

それにしても、『記憶の場』の意味をめぐってこれだけ執拗に問題にし続けている研究者集団は、本研究所のこのプロジェクトにおいてはなないだろう。この持続する意志が、反復以上の実質を生み出していることを願っている。